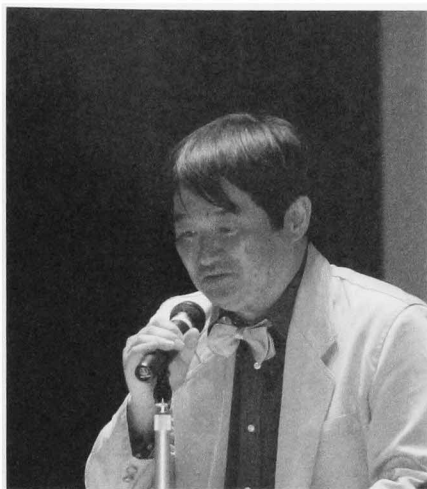


現地報告

「古座川流域圏」



梅本 信也

うめもと しんや

京都大学フィールド科学教育研究センター准教授

1959年、和歌山市生まれ。2005年より紀伊大島実験所長。里域生態系の起源と系譜、照葉樹林ならびに黒潮文化圏における里域生物の保全、自然保護区における異形要素の管理などの研究を行っている。趣味は、旅行と各地各国料理複製、聞き取り。

続きまして古座川プロジェクトの紹介をします。

古座川プロジェクトといえますのは、対象地域が紀伊半島の南部の約四〇〇平方キロメートルのエリアで、自然域と里域が指交しているところです。そこが古座川プロジェクトの対象域となります。紀伊半島南部の熊野地方の南半分が該当します。古座川は源流域を大塔山に持ちます。大変にきれいな山並みを呈する名山です。上流は大変に清浄かつ緑豊かで、巷間では清流古座川とも呼ばれています。中流域になるとさらに両岸とも緑いつばいの景色です。水面も美しい。ところが大量の降雨があり、流域にある七川ダムが緊急放流をする、と、白い濁りが下流に発生します。以前は二日ぐらいで清浄な状態に回復したのですが、今では白い濁りが一カ月以上続きます。

古座川河口域では冬を中心にアオノリが数トンも採れ、よい収入源だったのですが、今はほとんど採れません。ということで、関係漁協はダム管理者を相手に責任問題を追及しています。河口近くの河川敷は緑一面であり、一見美麗に見えます。緑の大部分はイネ科のツルヨシです。一方、大正から昭和

初期にかけての古写真を見ますと、河川敷には大型の丸石が卓越し、緑はほとんどない状態でした。丸石の間は隙間だらけで、絶えず水が流れていました。河川敷を実際に掘り下げてみると、現在では丸石の間に砂や土がきつちりと詰まっています。表面上は今でもきれいに見えますが、ほとんどコンクリートで塗ったような河川敷もしくは川底と同等になっていることがわかります。

ついに去年、古座川でもアユ冷水病が大量に発生しました。永續性の白い濁りと相まって、川全体の免疫力が下がっているのだと考えることができます。

さて、古座川プロジェクトの目的は現場中心の観察と現場対応できるいろいろな学識と技術を組み合わせ、対象域の水、生物、文化、景観などのいろいろなものを、あるいはその関係を適正化しようというものです。古座川プロジェクトの最終目標としては、関係構成要素とその関係を適正な連環状態にすることになります。人材という言葉で例えて言えば、人罪を人任に、人任を人材に、さらに人材を人材にしていくなまともという見方から言えば、その瞬間には適度にまとも



つているものを、系、地区、地域や流域でもまとまらせて適正化していくことになります。さらに言えば、今はどちらかというと人間だけを軸に考えがちですが、生存権がある程度は人以外にも拡張しながら適正連環所帯の考察をしていくことになります。実は立場や世代による認識のギャップとというのがあちこちに頑なに存在してしまっていて、地域を考える時、地球を考える時に大変に重要です。認識ギャップを解消しつつ、戦前または江戸時代の良い智慧も駆使しつつ、古座川に古きよき時代の、アユがウジャウジャいるような里川に戻していくというようなことが最終目標になります。

当センターの機能としては研究・教育・社会連携というのがありますが、古座川プロジェクトをその中で位置づけると、社会連携に重きを置くものとなります。

古座川プロジェクト参加メンバーはOBも含めたセンター職員、他の研究組織の有志、流域の住民の方々、各種流域団体です。自治体や県職員、これにもOBの方々も手弁当で多数参加されています。

古座川プロジェクトは二〇〇四年に田中初代センター長が始められたのですが、さきほど紹介のあった由良川プロジェクトのパイロット版として始まりました。古座川がパイロットとして選ばれた理由は、エリアの大きさが手ごろである、位置が良い、文化がそこそこまとまっている、それから実行拠点が近くにあるということでした。

具体的な実行内容としては、今から三年前の七月に古座川合同調査というものを始めました。この三月で第二十八回目を数えました。プロジェクトは、第一期と第二期に分かれていまして、まずは基礎調査、体制構築を二、三年かけて行い、二〇〇八年から本格展開しながら、先ほどご説明した適正連環状態を求めていく。多分二〇年か三〇年後に大地震が二、三回経験することになります。最終的には持続的な適正連環状態に該当地域を持つていくということになります。

最近の展開としては、合同調査を幾つかの班に分かれて毎月行い、年二回のペースで古座川シンポジウムを行っています。三月二十五日には「第六回古座川シンポジウム」が予定されていて、いくつかの講演が行われます。

どういう成果が出ているかと申しますと、毎月の報告書、二〇回または二〇回毎の報告集が出版されていますし、流域の問題点をわかりやすく書いたカラー絵本も出版しました。内容の一部を地域雑誌にも公表しています。まだまだではありませんが、現況だけではなくて、過去の姿も徐々に浮き彫りになってきています。

該当地域ではいろいろな会が立ち上がり、関係者が真面目に問題に取り組んでいます。そうした会活動の一つ、古座川流域協議会では私の発案で今年からは「古座川水カルテ」というのを作り、将来に向けての基礎データ固めをしようという流れになっています。その他にも例えば出前ミニ講義を実施しています。実際にミニ講義をして見ましょうか。地球というのは自然域と里域に分けると理解しやすいと考えられます。一方、系の保全には、*in situ*、*ex situ*、*on situ*の三類型があります。最初の *in situ* 保全は人間禁止の保全、二番目の *ex situ* 保全は現場から抽出して行う保全、最後の *on situ* 保全は絶えずこまめな世話をすることが基本になる保全で里域では基本的な保全戦略です。

ある景色、たとえば那智山や紀伊大島を含む写真は自然一杯と写るかもしれませんが、より正確には里域を構成する文化要素がユネスコ保全されている景色が一杯だということになります。

さて、古座川プロジェクトには四つの問題または壁があります。古座川流域にある一枚岩というのは非常に急峻な奇岩景勝で、大変にいい壁ですが、あとの三つはちよつとやつかない問題であり壁です。

古座川の一枚岩というのは二〇〇万年ぐらい前に火山活動でできたものですが、なかなか壮観な景色です。その表面に地衣類という菌類と藻類の共生体であるヘリトリゴケがありまして、これを測つて見ると直径が一・八メートルで世界最大ですが、単純に推定すると大体一千歳から二千歳となり、屋久島縄文杉級です。これは大変によい観光資源です。ザイルで下りないと絶対に近づけないので、保護もやりやすい。歌や俳句、短歌を吟じたくなるような景色です。

その一方、今から約五〇年前にダムができました。当初は治水専用のダムだったのですが、電気も起こそうということで多

目的にした結果、洪水のたびにダム保護のため放流しなければならぬという不思議なダムができてしまいました。放流のたびに下手をすると下流域が洪水になってしまいました。このダムのおかげで下からアユとかエビが遡上できなくなりました。それどころか一体化していた流域の文化がこのダムによって上と下に分かれてしまったということで、大変な影響を及ぼしている戦後構造物の一つです。

あと二つはまとめてやります。世代とか立場間の障壁の問題です。古座川アンケートというのを今から二、三年前にやりました。対象者約六〇〇名、回収率は九九・九%でした。整理して見て気付いたことは、何とか古座川を清流には戻したいし、戻せると思つているというのは世代間で共通認識なのですが、中高齢者は基本的に、堤防は土で、川原に草もなく、ごみもなかったというのが清流のイメージ。ところが若い方々は、緑であれば何でもOKと思つていて、ごみがあるかないかが清流かどうかの判断基準となっていました。だから、空き缶とかビニールごみが落ちていると汚いと映る。そういう意味で、かなり違うものを基準に見ているということがわかります。さ

らに例えば外来生物、例えばツルヨシなども、この地域にしてみれば外来生物ですが、高齢者たちは何だかんだ言いながらも、それを利用して使おうとする、しかもごみの一部は、庭で焼いたりあるいは野焼きして、肥料にしようとする。ところが若い人たちは河川の清浄、つまりごみを除去したあと、ごみ処理場に持っていくということで、利用、対処の仕方が全然違う。例えば原風景の世代間差が一つの原因となるのでしょうか。中高年層者と若い世代ではまったく違う景色を見て育っているから当たり前といえば当たり前ですが、原風景が違っている。

原風景に関連して、一つの典型をあげましょう。 balan 又はハランというのがお寿司用にあります、年配の方はこちらを本物または緑色の代替物をイメージするのに対して、若い人はどちらかというとハランというと balan の原型の陰も形もないカラフルなものをイメージしている。ですから、例えば「自然を守ろう」と言っても全く違うことを考える。認識ギャップは今後の活動でかなり大事な点だと思っています。

昔は「川で洗濯」だったのですが、これからは「川を洗濯」の

路線で、色々な立場や認識ギャップを超えてで合作しなければならぬ。

古座川プロジェクトでは、先述の最終目標に向けてゆつくりとですが、前に進んでいきたいと思っておりますので、前の二つのプロジェクトと同様、皆さんのご理解とご助力をお願いしたいと思います。以上です。